The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	キリスト教と「他界観」：フィジーにおけるキリスト教受容のドラマをめぐって
Author(s)	橋本, 和也
Citation	年報人間科学. 1986, 7, p. 83-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6444
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部（一九八六年三月）
『年報人間科学』第七号八三頁―一〇二頁

キリスト教と「他界観」

――フィジーにおけるキリスト教受容のドラマをめぐって――

橋本和也

キリスト教と「他界観」

―フィジーにおけるキリスト教受容のドラマをめぐって―

いくつかの宗派に分かれてはいるが、現在フィジー人は全員がキリスト教徒である。村に置かれた木製の大きなドラム(lali)は、教会でのミサの始まりを告げる。また毎夜八時を告げるラリも村の牧師の役割となっている。筆者が調査した村では、村会議が二週間に一度火曜日の夜に開かれたが、その時は村役の者が夕方大声で触れた後、夕食後ホラ貝を十分置きに三回鳴らした。三度目に各家から村人が出て会議場に当てられた家に入って行く。村会議そのものは一定の様式に従って執行される公式なものであるが、始まる時刻や始まるまでの過程は教会の行事に比べてかなりルーズである。ホラ貝によって告げられる村会議は村人相互間のなごやかな、冗談も交わる雰囲気を代表するのに対し、ラリによって告げられる時刻や教会儀礼は正確さや厳粛性（言葉遣い、服装等）を表わしている。このラリによって象徴される教会の活動は、村落生活に一定のリズムを与えている。一番顕著なものは日曜を中心とした一週間のリズムである。日曜日には労働がタブーとなっており、昼食にちょっとした御馳走をたべる。その日曜日の準備と次の一週間のための日用品をそろえるために、村人は土曜日に首都スバに村の産物（赤貝、ヤシの実、芋類）を持って出かけ、市場で現金を得る。市場の準備のために水曜日ぐらいから女達は、海に入って赤貝を集め始める。村落生活はタブーの日(siga tabu＝日曜日)を中心に営まれており、更に暦の日付けに従って定められた教会の行事が一年のリズムを村落生活に付与している。

キリスト教はフィジー人の生活の枠組を現在ではきっちりと決める役割を果たしている。その枠組の中で彼らはかなりの規制を公けには受けながらも、キリスト教受容以前の伝統的な思考体系をキリスト教的な思考体系と同時に駆使して、日常的な出来事に対処しているのが現状である。信仰現象の一つとして、村人にとっての tabu（禁忌）は夜墓場に行かぬこと、そこで死者の霊にヤンゴナ(yagona 胡椒科の草木の根を粉にして水に溶かした飲料）を捧げぬことがある。これは誰かを呪い殺す邪術であり、その姿をもし見られたら村にはもはや居られなくなる。フィジー人でさえ実際に邪術を目撃した者はいない。しかしその噂話は無数といっていい程あり、夜仲間同士がヤンゴナを飲みに集まった時には、半ば恐れながら次から次

へと各自の知っている話が出てくる。彼らの世界には、キリスト教以前の古い神々や死者の霊が未だに蠢めいている言わば夜の世界と、近代合理主義と共に受け入れられたキリスト教的世界が相互に影響し合って、新たな別の世界が現出していると言えよう。

「キリスト教と『他界観』」との題名の下で、右のような現実のフィジー人の世界観を解明するのが最終的な目的であるが、本論文では現実の姿を解明する重要な鍵を与えるキリスト教受容の過程を、段階を追って呈示するつもりである。その過程を明確にさせるためにV・ターナーの提唱する「社会ドラマ」の概念を適用し、キリスト教受容の過程をドラマとして描くなかで、フィジー文化が持つ異文化を取り込む装置、または社会的違反を調整する装置が、この受容の過程を一つのドラマとして成立させていることを示すつもりである。

《記述法としての社会ドラマ》

過程的出来事、とりわけ葛藤などの一見別々の文脈に属するような相互に関係のない出来事を一つのまとまりとして、研究上の分析単位と設定したもの(1)が、V・ターナーが提案した「社会ドラマ」である。このドラマは常に社会的過程を問題にし、その推移を(1)違反、(2)危機、(3)矯正、(4)結末という四つの観察可能な局面に分けて、出来事の進展とそれに対処する当事者の対応とを明確にすることを可能にする。V・ターナーのこの試み以来、人類学者が観察した社会的現象をドラマのメタファーとして呈示する試みが行なわれるようになった。B・マイヤホフは(2)米国カリフォルニア州に設立されたユダヤ人高齢者センターにおける老人の自己確認の問題を扱った時、老人は自分でささやかながら「存在のドラマ」を演出していると指摘した。そのうちそのセンターの名誉会長の誕生パーティでその会長が死ぬ事件が起こった。このような出来事に直面した社会集団が、対応不能な混乱に陥ることなく、その危機的状況に解釈を与え、危機を乗り越えていった過程を彼女は「文化ドラマ」として捉えた。

人類学者が観察し分析を加える問題は多岐にわたる。それぞれの内容にふさわしい記述方法が考えられてしかるべきである(3)。先のマイヤホフは、死や儀礼についての一般的理論を述べた後、民族誌学的舞台、存在のドラマ、儀礼の創造段階、儀礼の前提的文脈、儀礼執行、社会学的結果、儀礼の効果、儀礼・時間と連続性の順番で描いている。誕生パーティが死の儀礼になったという異常な事態に直面した筆者が、その両者を視界に入れたまま一つの儀礼的ドラマとして捉え、儀礼過程を明確に示し、解釈を試みている点は大いに評価されるべきである。しかし誕生パーティの主役がパーティの執行中に死に、祝宴が死の儀礼になるという大転換が生じた場合には、この出来事にふさわしい記述方法が採られるべきである。

儀礼自体の過程を前リミナル(プレ)→リミナル→後リミナル(ポスト)の三段階に分けるV・ヘネップの今や古典となった分析概念があるが、マイヤホフの事例では、儀礼の準備段階、儀礼執行、儀礼後の反響を問題にしている。この場合には、前儀礼(プレリチュアル)→儀礼(リチュアル)→後儀礼(ポストリチュアル)(4)という、一つの

儀礼にかかわるすべての現象を含む枠組を考えるべきである。枠組こそ明示していないが、彼女が儀礼の前段階と後段階の反響、特に儀礼の成功か失敗かにかかわる儀礼の反響を適確に捉えている点は注目すべきである。しかし、儀礼を三段階に分ける古典的な方法では、生を祝う儀礼が死の儀礼となった大転換を含む出来事を、その転換に焦点をあてて記述することはできなかった。このような転換を本来的に含んでいるものに、古典主義的演劇の構成法がある。それは「起→承→転→結」という継続する四段階を明瞭に示しているドラマツルギーである(5)。マイヤホフが経験した事例は、この四段階の過程を持つドラマとして提示すべきであろう。

本論文ではフィジー人のキリスト教受容という大きな転換を扱うことを前提としている。V・ターナーの社会ドラマの過程に見られる四段階は二者間の葛藤を分析するにはすぐれた概念であるが、フィジー全体のキリスト教受容という過程を記述するにはそのまま適用できぬ問題がある(6)。そのため両文化の接触以前(起)、接触(承)、対立・転換(転)、変容(結)、の四段階＝四幕のドラマとしてまず記述していきたい。その後、四幕のドラマとして記述する問題とフィジー文化が持つ異文化を受容する装置、すなわち社会的に承認されている調整の筋書きの存在とその特質についての議論をするつもりである。

《キリスト教受容のドラマ—四幕九場》

ドラマの舞台は食人習慣のあるメラネシアとポリネシアの接点にあるフィジー諸島である。十九世紀初頭、隣国のトンガ同様、首長の力による支配の下、対立する首長達と恒常的な戦争状態にあった。彼らの食人習慣は、白檀やナマコを求めてやって来た船員や捕鯨船の乗組員達によってイギリス本国でも知られていた。

第一幕　—接触以前—

〈第一場〉フィジーでの戦勝場面

フィジー本島東海岸にあるムバウ島では、敵の捕虜（勇者）の肉体が切断され、石焼きオーブンで蒸し焼きにされる(7)。赤ん坊を抱いた母親が死者の力を獲得しようと、子供の唇に死者の肉片を押しつけている。味方の首長の一人が死んだため、彼の妻達は一人一人呼び出されて首を絞められた(8)。妻の伴死は首長の魂が「魂の道」(9)(sala ni yalo) を通って飛び込み地点に行き、そこから死者（祖先）の国へ無事に辿り着くために、是非とも必要だと考えられていた。

〈第二場〉イギリス、ウェスレー教会

十九世紀初頭、教会でのミサが終った後、船乗りの航海日記について熱心な中産階級の信者が話題にしている。フィジーのような野蛮な国に神の福音を届けなければならぬ(10)。そこで教育と言えば日曜学校ぐらいしか受けていないが、信仰心が篤く殉教の覚悟を持った若者が、宣教師として南洋諸島に行く決意をした。

第二幕　—接触—

〈第一場〉トンガ、一八三〇年頃

宣教師の苦難時代である。フィジーの先駆的役割を果たしたトン

ガでは、派遣された二人の宣教師がお互いの悪口を本部に報告し合っていた。その一人J・トマスはトンガ人とのかかわりがかたくなで、彼が以前鍛冶屋であった事を知った首長が、斧の刃を磨いてくれるように頼んでも、自分は刃を磨くためにここに来たのではないと断った。怒った首長は彼をあやうく殺しそうになった。彼には殉教は始めから覚悟の上で、自分の命を助けるために関係を改善しようなどとは思いもよらないことであった。そのため彼が個人的に受け入れられることはなく、キリスト教もまた受け入れられることがなかった[11]。他にも同種の失敗を繰り返し、最終的には彼が滞在した土地の首長から「私の心は決まっている。あなたがあなたの神に耳を傾けるのは良い。私は私の神に耳を傾ける」[12]とはっきりと拒絶された。トンガでの布教は、人間的にもっと幅の広い、言語能力もある宣教師を待たなければならなかった。首長達が宣教師の滞在を認めるのは、彼らが持ってきた品物と白人を手元に置いているという名誉のためであった。

〈第二場〉 キリスト教の威力の承認

土地の首長の中には、西洋の品物だけでなく、宣教師の教えを認める機運が出て来た。しかしその背後にあるのは「キリスト教は真実だ。鉄製の斧やナイフは真実(本当の威力＝*mana dina*を持つ)だ。マスケット銃は真実だ。薬は真実だ。それだけのものを生み出した神は真実だ」[13]という伝統的な思考であった。眼前にした西洋の道具の持つ力を、神の力に由来するものと考えて、キリスト教の神の威力を疑う余地のないものと信じ始めた。

これらの首長は自分の体験から伝統的な神々に不信を抱き始めた時に、キリスト教を知った。しかし自らを納得させるために、あるトンガの首長は最初のトンガ人キリスト教徒と海に出て、今まで神と崇えられていたサメに銛を打った。サメには当たらなかったが、その神への冒瀆にもかかわらずサメは報復をしなかった。首長はその海にトンガ人キリスト教徒を投げ込み、無事に銛を持って岸まで辿りつけたら神を信じようと言って、自分は船で帰った。幸運にも信者は岸に辿り着いた[14]。フィジーでも、今まで神(*kalou*)だと言われた鳥が、神なら殺されぬはずだと、フィジーの若いキリスト教首長によって矢を射かけられ、殺された[15]。

宣教師の西欧医学と土着の司祭の治療呪術との対立が随所で見られた。初期にはトンガの首長の息子の病気を治そうと宣教師は悪い血を取って薬を与えたが、病気はかえって悪化した。土地の神にその息子を見せると、治った[16]。このような失敗が報告された後、コンドンの本部では医薬の知識を本格的に宣教師につけることにした。

フィジー東部、ラウ諸島の中心地ラケムバ島の首長の娘が病気になった。首長は宣教師に投薬を頼み、一時小康状態を得た。しかし土地の司祭が神々の建物が壊れているのが原因だと主張し、首長もそれに従ったので、その間宣教師は投薬を断った。娘の病気はたちまち悪化し、再び投薬が求められた。薬で一度娘はぐったりしたようになった。そのため宣教師は首長にあやうく殺される所だったが、翌朝娘は回復した。娘は以後熱心なキリスト教徒になった。

第三幕　―宗教的大転換―

フィジー本島東岸部の小島ムバウ島が一八四〇年当時覇権を握ろうとしていた。宣教師はこの島の大首長ザコムバウを改宗させることに全力を尽くした。舞台はムバウ島と隣島の宣教師の拠点となったヴィワ島である。

〈第一場〉（ヴィワ島）

ムバウ島のザコムバウ首長は全国征覇に余念がなく、再三にわたる宣教師の改宗の勧めに対し良い返事を与えなかった。隣島の首長であるナモシマルワは智将として知られ、甥のヴェラニと共にザコムバウにとって最も強力で信頼の置ける盟友であった。ヴェラニは、ヴィワ島を訪れていたフランスの貿易船を襲うようにムバウ島の首長から依頼を受け、気が進まぬながら船長と乗組員を殺した（一八三四年）。その後二艘のフランスの軍艦が報復攻撃を行なった（一八三六年）。智将ナモシマルワは島民をすべて避難させて死傷者は出なかった。しかし村を破壊した西洋文明の威力をまざまざと見せつけられたナモシマルワは、キリスト教への改宗を決意した[17]。

〈第二場〉（フィジー人同志の宗教的葛藤）

フィジー人キリスト教徒と古い神々の支持者との間に争いが生じた。フィジーの神々は嫉妬と食人の神々であり、フィジー全土に覇権を望む首長達の神々であった。ザコムバウは銃の威力と宣教師の話からキリスト教が真実であることを認め、ヴェラニと全国制覇を果たした後に共に改宗しようと約束した。しかし制覇は進まず、ヴェラニは戦いの棍棒でそれ以上人を殺し続けることが出来ず、先に改宗し武器を捨てた。彼は以後積極的にキリスト教の伝導につとめ、ヴィワ島で精力的に布教活動を続けている宣教師の大きな力となった。盟友のザコムバウから請われても戦いには参加しなかったが、それ以外の手助けはした。ザコムバウは父の死後 *Vunivalu*（戦いの源）の称号を継承した。彼は少し前から *Tui Viti*（フィジー王）と自ら称し、父の地位を継いでからフィジー王にふさわしい船を所有したいと思いアメリカに注文した。約束の期日になっても届かないので、シドニイにもう一艘注文した。両船が届けられた時支払いが思うように出来ず、後者を解約したが違約金を取られ、人民への負担が大きくなった。これを契機にして彼の勢力にかげりが生じ、対立する勢力であるレワの首長が台頭し始めた。

ヴィワ島の勢力下にあったオヴァラウ島の山地民が敵方に寝返った。ヴェラニはザコムバウに請われて、そこに武器を持たず数人の伴を連れて説得に行った。敵側から山地民の首長に彼を殺すように働きかけがあったが、皆躊躇した。しかし皆殺しにすると脅かされて、ヴェラニを銃弾で倒した[19]。

〈第三場〉（ムバウ島）

ヴェラニの死後、ムバウ島を取り巻く状況は悪化した。ザコムバウは病気になり、またこの島を訪問して帰ったばかりのある首長が戦いで殺された。宣教師にその時、神は再三ザコムバウに忠告を与えてきたが、このままでは彼もその首長と同じ運命を辿るだろうと言われ、改宗することに決めた（一八五四年）。これにはトンガの王からの勧めもあり、それにザコムバウにはもはや覇権を唱える力が

なくなっているという事情もあった[20]。これを機会にムバウ島勢力下の八八七〇人が改宗した[21]。

第四幕　―変容―

〈第一場〉（ムバウ島）

ザコムバウが改宗し、棍棒による法から神の法へと移行した。それをきっかけに同じムバウ島内の反対勢力に、敵方から強烈な働きかけがあった。宣教師にとっては、もはや武器を捨てキリスト教徒となったザコムバウをこのまま見殺しにしては今までの布教活動は無に帰してしまう。レワの勢力はムバウ島を取り巻いているが、ザコムバウに味方する勢力も多い。宣教師達は敵対する諸勢力の中心地で布教活動を行なってきており、各地で首長達から一目置かれ、アドヴァイザーや医師としての役割も果たしていた。彼らは総力をあげて、今までの人間関係をすべて利用し反対勢力の説得にまわった。敵側はムバウ島でザコムバウに父親を殺されて復讐しようとしていたある首長に多大な報酬を約束して、再三闇討ちをするように要請していた。この首長が日曜日に教会で大首長を殺すという噂をきき、この島の宣教師は家族をヴィワ島に避難させ、自らはこの首長の説得にあたった。ザコムバウの罪は罪だが、今や改宗したのだから彼の生命を助けてくれるように頼み、承諾された。

この事態の推移を近くでうかがっていたレワの大首長は、「もしザコムバウが本当にキリスト教徒となったのなら、彼の立場を尊重しよう」と述べ、様子を覗うため一時兵を引いた。その翌年一八五五年にこのレワの大首長が死に、その勢力下にいた首長達はそれを機会にムバウに従った。ザコムバウは敵側についた人々に慈悲を示した。降伏した側は今までに経験した事のない処置に奇異の念を抱き、キリスト教の教えに注意を払うことになった。

〈第二場〉トゥカ（*tuka*）運動の中心地

フィジー本島北部山中ゾロ地域はまだキリスト教と具体的な関係を持たぬが、顔を黒く塗ったフィジー人の一隊が何梃か銃を持ち、指揮官の命令の下でヨーロッパの兵隊を真似た教練を行なっている。その後、信者を前にしてこの運動の指導者ブォサ・ヴァカンドゥア（*Vosa Vakadua*）が説教を行なっている。

「創成神たるンデンゲイ（*Degei*）に背いた双子の兄弟は、大洪水によって城砦を流されて敗北し、ムブロツクラ（*Bulotu Kula* ＝祖先の島）に渡ることを条件に生命を助けられた。その島ではいかなる罪も犯すことが禁じられていた。この島での生活に感銘を受け、今まで犯した罪を悔い改めた双子の兄弟は、自分達の教えを『トゥカ（祖先）』教として広める決心をした。二人はヨーロッパ人に雇われていた私（名前を *Dukumoi* 後に *Vosa Vakadua* と改めた）にその教えを伝えた。一週間を七日とする。二人の主（双子の兄弟を神とした）に信仰を捧げ、罪を犯さず、平和と休息を守れば、ムブロツクラにおける不死の生を授けられる。不信心者は永遠の火に投げ込まれる。二人の主は私に死者を甦らせたり、石焼きオーブンの中で焼かれても火傷をしない力を授けた。……[22]」

この運動は一八八五年頃に植民地政府[23]にとって脅威を与えるも

のとなり、主謀者はロトゥマ島に流された。

以上フィジー社会のキリスト教受容の過程を四幕のドラマとして呈示する試みを行なったが、この記述法について少し議論する必要がある。その特徴として、本論文の文脈から次の三点が掲げられよう。

①本来連続している出来事を、時間・空間的に分断することにより、又は不連続な出来事を連続的に並べることにより、全体的な過程の各段階の特徴が明確になる。

②ドラマとは基本的に対立する複数の要素(24)より成立する。それ故登場人物（各要素の体現者）と場面を明確に設定し、その対立関係を具体的に呈示し得る有効な手段となる。

③ドラマは本質的に対話によって成立し、相互の関係の変化をあらかじめ前提としているものである。それ故、複数の要素の接触前、接触、対立・転換、変容という動態を記述するには、四幕のドラマはすぐれている。

今回のドラマ構成には、一つの出来事の推移の過程を追っていくというV・ターナーが試みた方法とは違い、多分に筆者の恣意性が含まれている。しかしこの危険をあえて犯さずに様々な要素が介入する文化変容の概要をつかむことは難しい。また社会ドラマという概念に対する批判としては、社会的コードに抵触する出来事、または今回のような変化に対し社会的な反応があり、何らかの結末に導びかれればすべて社会ドラマと考えられ、その概念の曖昧さが指摘される。しかし逆に言えば、筆者が引き合いに出した「起→承→転→結」の四段階は、人間精神が物事の推移を捉えるかなり普遍的な意識構造であると言うことができる。しかし問題は出来事を結論に導くどんな文化的な装置（＝社会ドラマ）があるかを解明することであり、更にその社会ドラマは出来事の推移過程を四段階に分けて呈示しえる一つの効果的な記述法でもあることを明確にすることである。

フィジー文化には、規律に違反した者が仲介者を立てて村の首長に謝罪を申し入れる儀礼（i bulubulu）がある。また争いを起こした者同士の間に年長者が入って両者の調停を行なう儀礼もある。両儀礼とも同じ名で呼ばれ原因こそ異なるが、手続きは同じである。夫婦喧嘩も程度がひどくなると、この儀礼に訴える。夫が妻を殴ることがよくあるが、妻は荷物をまとめて出身の村に戻る。しばらく時間を置いて適当な時機に夫側から謝罪を申し入れる儀礼を行ない、通常は無事に元の状態に戻る。村落レベルでは、規律違反にしろ喧嘩にしろ起こる時には突発的であるが、それ以後は当時者は双方とも伝統的に了解されている筋書きに従って行動することが期待され、かつ実際にその筋書き通りに行なってもいる。

村落間レベルでは公式な訪問には厳格な規定を伴なった儀礼が行なわれる(25)。個人的な訪問にも簡略化されてはいても必ず訪問者からヤンゴナが挨拶のスピーチとともに渡される儀礼が行なわれる。これは村落間に何らかの問題が生じた時、とりあえず両者間の交渉の場が儀礼的手段によって保証されていることを示している。申し

出は承諾されることも、拒否されることもあるが、正式な使者はそれなりの歓迎儀礼を受け、所存を述べることが可能である。先に示したドラマにはその儀礼を盛り込むことができなかったが、初期の宣教師が首長の妻達の伴死をやめさせるためにタムブア（鯨歯）を持参したと言われている。また最後の局面でムバウ島の反対勢力から働きかけられていた首長を宣教師が説得した時には、個人的ではあるが訪問儀礼が行なわれたはずである。個別的な事例で見るようには、フィジー文化が持つ調整機能を複雑なキリスト教受容の過程で容易には指摘できぬかも知れぬが、確かにそれは存在していると言うことができる。四幕のドラマの舞台背景を明確にしながら、《外来王たる首長、征服王たる神》《食人の象徴性》《キリスト教信仰の多元性》の順に、フィジー文化に特徴的な問題調整の仕組みを明確にしていきたい。

《舞台背景――様々な対立する要素》

ここで呈示した四幕のドラマの枠組は恣意的なものである。一つの出来事の継続する過程ではなく、様々な局面を持つ不連続なフィジーのキリスト教受容の過程を一つの全体的な流れの中に構成したものである。

第一幕（段階）は、キリスト教または西洋文明との接触以前である。厳格な意味では接触前の記録は存在せぬが、ここでは宣教師達が排除すべきだと考えていた異教の恐るべき慣習が実践されていた時代をさす。死者の肉を口にし、死者の妻達の首を絞めて伴死を行ない、一夫多妻制を実践していた事は、キリスト教的世界観からは単なる「野蛮」な風習と映った。しかしそれらの風習にはそれぞれの存在理由があり、フィジー人の「他界観」や政治制度[26]と密接に結びついていた。当時イギリスは世界に覇を唱えた時期であり、自文化を中心に世界が動いており、周辺の異教世界はキリスト教化されるべきだと特に宣教師達は信じていた。だからこそ殉教をも覚悟して野蛮な世界に単身赴任してきたのである。

第二幕は接触が始まった時期である。宣教師以前にも西洋の船が訪れ、中には漂流してフィジー社会で生活する者も増えてきた。彼らは自文化を押しつけることはなく、むしろフィジー文化に自らを合わせていた所がある。首長は宣教師をも含めて異邦人を客として抱えていることを誇りとして、自らの庇護下に置いていた。この時から外国船を相手に交易が始まり、白檀やナマコが鉄器等と交換された。西洋的な価値観からは、安い鉄製品と高価な白檀やナマコの交換は不正なものと映った[27]。宣教師はフィジー側に西洋での交換価値を教えて、貿易業者を詐欺師として糾弾した。しかしこれは二つの異なる交換比率を操作することによって利益を得るブローカーという職業を妨害することになり、宣教師は同じ西洋人である交易業者やビーチコウマー（西洋人漂流者）を敵にまわすことになった。

一方初期の宣教師と南太平洋の人々との関係もそれ程うまくはいっていなかった。中産階級の熱心な信者ではあっても、宗教教育、言語教育、医学教育等とは無縁な者達が宣教師となっていた。その上まだ具体的な布教方法が確立していず、宣教師同士の間で意見の

対立が生じ、それが感情的にお互いを中傷する結果になった。

この時期の第三の対立は首長と宣教師の間に見られた。首長が異邦人を引き受けたのは珍しい品物を持つ変わった容貌の人間の面倒を見るという名誉のためであった。その客が村人の行為に首長でもないのに規制を加えるのは、首長に対する侮辱であり棍棒で殴られても当然の行為であった。また宣教師の人格的な不寛容性が災いして、つまらぬことで首長を怒らせ不必要な軋轢を起こした例も初期には多くあった。

第三幕は大首長の宗教的大転換の段階となる。フィジーのような首長制の下では、平民は首長に従っており、首長が改宗せぬ限り自分の意志で改宗することはあまりなかった。フィジーの代表的な地域ではニュージーランドやトンガ等で経験を積んだ宣教師が、医学や言語学を学んだ者や印刷技術を持った宣教師とともに布教を行ない、一応の成果を得ていた。首長の身内の病気に関して、宣教師の西洋医学と伝統的な呪術治療とが真正面から争う場面がよく見られるようになり、即効性において呪医がことごとく敗退していった。

しかし大首長の改宗の背後には、キリスト教国の強力な武力的脅威が作用していた。ヴィワ島の智将ナモシマルワはフランスの軍隊の圧倒的な武力に打ち負かされたのを契機に改宗した。宣教師もまた自分達の安全を確保し、キリスト教の背後にある西洋文明の力を誇示するため、大砲を装備した船を自分の任地に回航してもらった。改宗したヴィワ島の若き首長ヴェラニが銃弾で殺されたことは、フィジー人同士の内戦が宗教戦争の様相を呈し始め、新しい時代に入ったことを示している。大首長ザコムバウは、自らの政策の失敗によって勢力にかげりが生じた時、改宗を決意した。そして彼を訪問した首長が殺されて今までになく気が弱くなった時に、宣教師からそれが神の忠告をきかぬ者の運命だと言われ、驚かされたり脅かされたりしながら、改宗に踏み切った。彼の改宗とともに八千人程が一度に改宗した。そのためキリスト教はザコムバウの宗教と言われた。

第四幕はザコムバウの改宗後、宣教師が彼を素手で敵側の大首長から守る戦いであった。戦いの邪魔をする宣教師が殺されなかったのは、彼らの背後に強力な軍隊がひかえていたからである。一対一の説得では個人的な資質が問われるが、宣教師全体の立場は彼らもその一部でしかない西欧の列国の意図を表象しているのである。トゥカ運動も含めたこの当時の状況が程度の違いはあるが、現在までのフィジーでは続いていると言える。それは現在のキリスト教を扱う時に譲りたい。

こまかい局面では、ヴェラニとザコムバウの間に興味深い関係が見られる。社会が安定している時には元の状態に戻るのだが、当時はヴェラニの改宗に憤慨したザコムバウだが、その後武器を持たぬヴェラニと新しい関係に、依然信頼関係を保ったまま入った。しかしながら全体的過程では次項のようなより宗教的レベルでの受け入れのシステムを問題にしなければならない。

《外来王たる首長、征服王たる「神」》

フィジーで権威を持つ称号を持つ首長の祖先のほとんどは、現在の土地に後から征服王として到来した。伝説の中では、先住民の首長と上陸時に戦ったという話はほとんどなく、土地の首長が外来の首長の威厳[28]に打たれて臣下となった。本島東海岸ムバウ島を中心とする勢力圏を築き上げたヴサ・ラトゥ部族は、本島北部の海岸に上陸した後、東部に進攻し次第に南下して先住の人々を支配し、要所の村に首長を配置していった。先住の人々の子孫によれば、食人を行なったのはこの首長階級の人々であると言うことになる。

M・サーリンズは「フィジー諸島における生の女性と焼かれた男性…[29]」と題する論文の中で、食人習慣は文化の起源に由来する一つの制度であると述べている。首長とは外来の戦士達の長で*kai tani*（他所者）または*vulagi*（聖なる客、または天上の神）と言われ、土地の首長は娘かまたは土地の豊穣性をこの外来王に伝説上では与えている。実際にも土地の首長は外来王に娘と一籠の土を贈って恭順を示していた。フィジー人は「首長は我々の神である」と言うが、それは姉妹の息子には母方のオジが神に捧げた供物を受け取る（*Vassu*）権利があり、彼は母方の人々が祭る神々の代りと見なされているからである[30]。

フィジー人が食べた人肉（*bakola*）は神々の食べ物である。首長が食人を行なうのは、それによって不可視の存在たる神々と同一視されるためであった。それを説明すべき傍証として、フィジー本島の東部で首長に平民が挨拶する時に「私をお食べ下さい」と言う。また高位の首長への饗宴が持たれるとき、謙遜の意味で「食物がありませんが、人々が食べ物です」と挨拶を行なった。原則的には神はその特性に見合った供物を受けるべきである。それ故神たる首長には、敵の首長か名立たる武将が供犠されるべきであった[31]。以上のように述べてサーリンズは、食人習慣はフィジーの文化的起源に溯る一つの制度であると結ぶ。土地の首長が「生の女性」を征服者たる首長に捧げ、外来王が「焼いた人肉」を土地の首長に分配するシステムは、基本的な交換関係を支える重要な制度であった。

以上の説明から、外来の征服者たる首長は、土地の人々が祭る神と同一視されていることは明確である。

そこにキリスト教宣教師が使命感に燃えて入ってきた。初期には首長の保護下にいながら、首長なみに、または首長以上の命令を下す者もいた。トンガに赴任した宣教師は、布教活動の初期の失敗を一身に背負うことになった。赴任地の文化を理解せぬまま自己本位の振舞いを行なった。そのような機会に何度か出会ったトンガの首長は、その宣教師が首長になろうと考えていると感じた。以後もその宣教師は相手の文化コードを理解せぬまま、自己中心的な行動を取り、結局は首長から受け入れられず、失意のうちにトンガを去ることになった。

首長達と宣教師の関係が安定し始めたのはキリスト教の威力が認められてからである。「キリスト教は真実（*dina*）だ」とは宣教師に接触したフィジー人なら誰でもが認めたことである。彼らは鉄製の斧やナイフ、マスケット銃、医薬品の効力を眼のあたりにし、それだけのものを生み出した西洋人の神を彼らの神以上の存在だと認

めた。しかし、キリスト教が要求したことはフィジーの首長制とは根本的に対立することであった。食人、一夫多妻、妻達の伴死をやめることは、首長制を支えていた社会構造や他界観を崩壊に導くことになる。食人と一夫多妻は、外来王と土地の首長達との交換体系を形成しており、当時のフィジーにとって社会・政治的な基本的構造を支える制度であった。妻の伴死は、男の死者にとってその魂が無事に「魂の道」を辿り、死者達（祖先）の国へ入るために必要なことであった。

宣教師がまず行なったことは、妻達の伴死が行なわれる現場に駆けつけて行き、タムブアを首長にさし出して妻達の生命を助けることだった。ザコムバウは改宗前に、父のタノアが死んだ時父の遺された妻達を絞め殺そうとした。既に二人が殺された時に隣りのヴィワ島から宣教師がかけつけていた。ザコムバウは五人の伴死者（父の妻達）を選んでいた。宣教師の説得に応じて残った一人の生命を助けようと考えたが、この時は彼女の方が拒否して自ら進んで死んでいった(32)。本来なら妻達全員が絞め殺されるはずであったが、改宗以前でありながらもザコムバウはその中から五名を選んだ。他の例では乳飲み子がいる場合には、代理をたてたり免除される場合もあったが、この事例では彼女は厳粛に自ら死を受け入れている。宣教師は「私は彼女達を愛している」と叫んで残った三人の命請いをしたが、首長は「われわれも彼女達を愛している」と答え、それも宣教師がいるから五人に減らしたのだと告げた。ザコムバウは覇権を握ったら改宗することを既に誓っており、キリスト教を認めながらも、在来の信仰に留まっている限りは今まで通りの伴死を執行した。宗教的領域での問題ではあるが、多分に政治的であった。

キリスト教の威力を知った首長にとって、それが体制にいかなる影響を与えるかが重大な問題であった。トンガ近くのオノ島がフィジーでは最初に改宗した。その島のレポートが関心を抱く他の首長達のもとにもたらされた(33)。キリスト教改宗者は、合法的だと考える奉仕や仕事には自ら進んで加わり、支配者に感謝を示していた。首長達には尊敬、献納、労役を怠らないなら、キリスト教を認める用意があった。しかしながら支障がなかった訳ではなかった。一年の始めての収穫物を従来通り神々に捧げる儀式（*i seru*）と、日曜日に課せられた労役を彼らは拒否した。ラウ諸島北部のロマロマ島にタヴェウニの大首長が訪れたのは日曜日であった。この大首長は恐ろしい食人者として知られていたが、実は宣教師を領地内に受け入れていた人物であった。ロマロマのキリスト教徒は日曜日にはこの恐ろしい首長の歓迎儀礼に参加しなかった。他の島民はこの首長から恐ろしい制裁が加えられると思ったが、次の日にキリスト教徒が献納品を持っていくと、大首長はそれを丁重に受け取った。キリスト教徒達は逆に彼と彼の臣下から好印象をもって受け取られた。

これらの逸話から首長制の体制自体を脅かすものでなかったら、首長は別に布教活動を妨害せず、信者達の自発的な献納を待った方が効率が良いことに気付き始めた。またキリスト教の神が真実（*dina*）であることを眼の前にしてからは、古い神々に殊更こだわっている様子は見受けられない。首長にとっての最大の関心は自分の権威が

尊重され、献納が滞ることなく行なわれることである。初穂という形では強制的に神々への供物（＝首長への献納）がなくなっても、自発的な権威者への贈物がそれ以上のものであるならば、首長にとって経済的には問題が生じない。

首長自身の改宗にとって最大の問題は、武器の放棄の問題である。ヴェラニやナモシマルワのように大首長がザコムバウの勢力圏内で武器を捨てた場合には、直接敵の脅威に晒されることはなかった。しかしザコムバウの場合は、ライヴァルのレワの大首長と戦っている最中の改宗である。以前から考えていた如く全フィジーを平定してからの改宗か、トンガ王の如く武器をもって異教徒を征服するのなら、それ程問題はなかったはずである。しかしザコムバウの改宗と武器の放棄は、彼を取りまく状況を最悪にした。今まで武力で抑えていた人々を自由にした。中には父親を殺された恨みをはらそうとする者も出てきた。敵側の大首長と同島内の反対勢力からザコムバウと彼の宗教＝キリスト教を守ったのは、素手の宣教師達であった。今までのフィジーにとっては思いもよらぬ奇跡的な出来事であった。しかしこの時までにはフィジーの主要な首長の所に宣教師が入っており、キリスト教の威力を十分に知らせていた。レワの首長も、ザコムバウの改宗が真実なら、今後ムバウ島からの侵略はなくなるのでそのままにしておいても危険はないことを承知していた。キリスト教に関して彼らは同一のコンテキストを所有していた。そして宣教師の背後に厳然としてある強大な武力も共に認めていた。

キリスト教受容後も、政治的体制にとっては構造的な変化は表面的には見られなかった。その主な原因として宣教師達が頭に描いていた政治体制の理想的な姿が、彼らの出身地であるイギリスの君主制であったことが掲げられる。首長＝神と見なされる文脈内で、政治と宗教を分けて考えることは問題であるが、大きな変革はまさにこの領域で起こった。政治の領域から宗教の領域を分離させた所に、宣教師達の成果があったと言えよう。それまでは司祭が首長に任え、神の意図を伝える役割を果たしていた。しかし改宗後彼らの役割はなくなり、彼らが任えていた神々はテボロという名の下に闇の世界に追いやられた。宣教師の地位は、首長に代わるものではなく、むしろ聖的世界を独立させて、そちらの世界での最高位に彼らは就いた。その世界の中では首長も宣教師に導かれる一信徒となり、逆に世俗的世界では、異邦人たる宣教師は丁重に迎えられるべきゲストとなっていた。

フィジーやトンガの首長達が新たにキリスト教を受け入れるかどうか迷った時に、それまで神とされていたサメや鳥を殺し、聖地とされていた墓地を壊して、古い神々が報復するかどうか試した。その時には既に彼らは新しい視点から古い信仰を見直し始めていた。彼らは二つの信仰体系を並置し、効力の有無による選択を行なった。それは次の三項目に特に見られた。

(1)棍棒　　：鉄製の斧と銃
(2)神々の力　：薬品の力
(3)呪術的知識：キリスト教的・科学的知識

この場合キリスト教は常に西洋文明と同時に語られなければならな

い。当時のフィジー人にとって宗教的価値は *mana* の効力にあった。今までの神々に疑いを持ち始めた人々には、新しい神は圧倒的な威力を持つものに思えた。武器の威力の違い、治療の効果の違い、そして文字教育と文明についての知識は、選択する立場にある首長達にとってはとりわけ決定的なものであった。

神の下での平等性は首長にとって問題の一つであったが、改宗してみるとそれが取り越し苦労であることが判明した。宣教師にとって首長制は当然の政治体制であった。教会では確かに平等ではあるが、首長は改宗とともに教育を率先して受け、臣下よりも能力を発揮し、先に教師となり、結局は人々を導く立場に立つことも多かった。教会の座席順位には問題が残った。たとえ宣教師でも首長より上には座ることが許されなかった。それ故教会には説教壇より上か、または同じ高さになるように首長の席が設けられた。これは現在でも使用されている。

フィジーでは、食人の外来王を征服者たる首長＝神として伝説の文脈の中で、迎えた。そして、キリスト教の「神」もまた伝説上の外来王の如く直接的な武力ではなく、その威力によってフィジー人に征服王として迎えられたと結論することが出来よう。「神」とはフィジー人の考えでは西洋文明をその担い手にもたらした存在であった。改宗はその知識を獲得するための手段であった。宣教師だけでなく、彼らを取り巻く西洋世界がフィジー人が跪くべき王であった。「神」とは、具体的な力を自ら行使しないが、薬や銃などを媒介にしてその威力を示し、いざ事があれば強力な船隊を派遣し得る絶大な力を持つ存在であった。この意味で「神」は征服王として、フィジーの大首長の上に位置することになった。首長達は「神」の導入者としての役割を負うことになり、積極的な場合には教師になった。そして教義の学習は、「神」を中心とした新しい世界観を徹底せることであり、「神」を頂点に置き、首長達から聖性を奪い取る新しい体制を教育することであった。

《具体的であろうとパンとブドウ酒が使われようが、食人は象徴的である》

食人も聖饗も、本来隠喩であるものを換喩として扱っている点で、同じ思考形態を持っている。先の論文でサーリンズは「食人は現実に行なわれている時でさえも象徴的である[34]」と述べているが、まさにその通りである。

改宗してキリスト教徒となったフィジー人は、今や人肉を口にすることを止め、パンとブドウ酒による聖体拝領を受けている。パンはキリストの肉であり、ブドウ酒は血である。それを体内に入れることで「神」の力を受けキリストと一体となる。これはまず物理的経験の世界と形而上学的想像の世界という二つの違った文脈を恣意的に連合させて、パンを肉としブドウ酒を血としているのである。キリスト教では、それを宗教的表現として、その隠喩性を背後に隠して、前後（原因―結果）関係を持つ換喩性を主張している。[35]

食人の理由は一様ではないが、典型的には敵の勇者の死体を食べ、彼の力を体内に受け入れようとした。物理的経験の世界と形而上学

的想像の世界という二つの異なる文脈を連合させている点は、キリスト教の聖体拝領と同じ論理構造である。ただ本物の人肉を使っている点が、大きな（キリスト教的には決定的な）違いである。しかし実際はそれ程単純ではない。食べられるべき犠牲は必ずしも勇者ではなかった。高位の首長を迎える時には、焼いた人肉を捧げる習慣になっており、人狩りに出かけていった一隊は、女性であろうが子供であろうがかまわずに調達して来た。そこで手に入らぬ場合には支配下の食べられるべき階級の者を殺してさし出した。この場合の論理は少し複雑になる。

供犠の古典的な論理(36)によれば、供犠者は犠牲と同一視され、神に捧げられる。ここでフィジーでは臣下の者が首長に最大の敬意を示す言葉が「私をお食べ下さい」という表現であったことを思い出さねばならぬ。迎える側は、自分達が捧げる人肉を自らとして、訪問者（＝神）に提供するのであった。このような説明をフィジー人から聞くことはないが、しかし彼らが実際に行なっていたことは、高位の来訪者を神と見なし、自らと同一視される供犠をさし出す儀礼は、相手に対する最大の敬意の表明であった。

様相は多少異なるが、キリスト教化された現代でも正式な訪問儀礼では同じ論理が見られる。一九八二年十月末にヴィワ島で行なわれた訪問儀礼では(37)、訪問者がまず村の入口で村の使者からタムブア（鯨歯）を一つ受け取り、その後村の中央で村の首長が待つ式場に入る。まずホスト側からゲストにタムブアとヤンゴナの若木が贈られた後、丸焼きの豚が生のタロ芋と共に贈られた。それに対しゲスト側からは、タムブアとヤンゴナの若木が、その後に生きた豚や亀と生のヤム芋やタロ芋が贈られた。先に、生の女性を土地の首長が献上する見返りに、征服者たる外来王が焼いた人肉を供したという説を紹介したが、この場面では様子が大分異なる。筆者が実際に観察した一村落内での交換様式が参考になる。

ヴィワ島では現在でも心ある村人は自発的にタロ芋やヤム芋の初穂を首長に届けているが、その時は必ず生のまま籠に入れて持って行く。それに対し身内や近所にお裾分けとして持って行く時は、料理したものである。

生のもの　：　料理したもの

という二項対立は、一村落内の贈物交換の文脈では、

村民↓首長　：　身内同志

という対立となって見られる。更に先に示したキリスト教以前の文脈に戻すと

村民↓首長　：　首長↓村民

という対立になる。この時には首長は自らを供犠の動物と同一視し、神に捧げた後に直会の肉として臣下に与えていたことになる点に注意しなければならぬ。しかし前述の訪問儀礼においては、ゲスト側の首長にホスト側は自らと同一視し得る焼いた豚を贈り、ゲストから受け取った生の食物を分配している。一村落内の文脈だけから見ると、「上位↓下位」の焼いたものをゲストに与え、「下位↓上位」の生のものをホストが受け取るという矛盾が生じているように思える。

ゲストをホストより下位に位置付けるのは論理的に矛盾する。し

かしそれは一村落内での文脈における論理であり、この訪問儀礼では村落間の文脈か更には人間と神との関係の文脈に置き換える必要がある。ゲストに焼いた豚（人肉）を捧げるのは、ゲストを神と設定し、神になす如く犠牲を焼いて供犠を行なっているのである。サーリンズが供犠の論理に触れず、土地の首長が外来王に「生の娘」を贈り、外来王は土地の首長に「焼いた人肉」を贈ったという時、その肉は神に捧げられた後に分配される直会用の食物であることを忘れてはならぬ。以上のことから、現代の訪問儀礼においても、外来の首長を迎える時に供犠を捧げるという構造には不変のものがある。ただその外来の首長は「生のもの」をホスト側に贈って、「下位→上位」方向の敬意を表明しており、形態は違うが相互に敬意を表明し合っている点で、一村落内の交換関係とは違っている。

《結論にかえて、――キリスト教信仰の多元性》

キリスト教布教の初期に印刷機が持ち込まれ、翻訳された聖書の出版も行なわれたが、信徒の学習速度になかなか追いつかぬ状態であった。現在では各家に一冊フィジー語の聖書が置かれ、代表的なフレーズは暗記されており、聖歌をすべて暗唱できる者も一村に必ず何人かいる。キリスト教的教育がこのように広く行きわたっている現在でも、改宗とともに追放され夜の世界の存在となった昔の神々（*tevoro*）が、今だに村人の生活を脅かしている場面に出会うことがあったり、噂話を耳にすることがある。人の死と病気に主にかかわるが、その他にもそれ程重大な結果を招かぬ不可思議な存在との邂逅が語られたりしている。

現在はすべてのフィジー人がキリスト教徒である。調査に入りたては、初めて首都のキリスト教会を訪れた時と同様、古い信仰についての話を聞くことができなかった。確かに、彼らが現代ではキリスト教以前の霊的存在を「宗教」のジャンルとしては考えていないことがその原因として掲げられる。しかし村で生活をしていると、公けのキリスト教的世界から離れて、村人の噂話の中ではテボロの話をよく耳にした。墓場に夜出向き、死者の霊を呼び出し、ヤンゴナを捧げ、「某の死」を依頼した者が、その死者の霊に断られ、逆に死ぬはめになったとかいう話は聞いても、その現場を実際に目撃した者はフィジー人の中にもいない。しかし邪術をかけられた経験の持ち主にはよく出会った。また畑を開墾するために切った木の霊が夜二人で襲ってきて喉を絞めたと告白する説教師（*vakatawa*）もいれば、海の方から見知らぬ娘が来て挨拶をしまた海の方へ帰って行ったという若者もいた。娘の霊が村の若者を気に入り妻となっており、彼女が訪れる時にはその若者が癲癇の症状に襲われるとか、少年が睡眠中に起き上がって村を歩くのは彼に白髪の老婆が憑いているからだという話を聞いた。

若い頃金鉱で働いていた時、仲間の一人から邪術をかけられた村人がいる。彼は邪術をかけられたのを知った時ただちにキリスト教会に駆け込んで熱心に祈った。その邪術から救われた後、彼は熱心な信者となり教会で説教する資格（*mana*）を得た。霊の妻を持っている若者に関しては、一方では彼の癲癇の説明がそれによって成

立する。その上彼の母親やその場に居合わせた者達が、戸の鳴る音を聞き、細身の女の姿を見ているので、その霊による説明には説得的な所があった。他方では、熱心なキリスト教徒の老婆に言わせれば彼を「病院に連れて行く」べきなのである。現実の生活レヴェルでは、キリスト教的・合理主義的な思考が存在する一方で、呪医を訪れる人々が多くおり、病人から悪い霊を追い払い、薬草を与え、病気の治療を依頼している。また呪医に軍隊内での昇進を頼みにくる兵隊もいる。

フィジー人がキリスト教を受け入れたのは、彼らの思考様式に従って「神」の威力を認めた結果であった。初期の成果について、「今や人肉を食べず、パンとブドウ酒で聖体拝領を受けている」と宣教師は満足して述べていた。たしかに人肉がパンに変換したことは、「野蛮」から文明への変換を徴付ける大きな業績であった。しかしフィジー人の論理構造を変えた訳ではなかった。彼らを支配する者はマナを持っているべきであり、そのため首長＝神のマナ以上の力をキリスト教の「神」に認めるや、首長は世俗王となった。更に英国にフィジーを移譲（一八七四年）してからは、英国女王の支配下に入った。政治・宗教的によりマナの強い存在の下に組み入れられていく構造は、フィジーには伝統的に見られるものである。知り得る限りの歴史では、征服者が自分の文化を一方的に押しつけることはなかった。起源神話の中ですら、征服者側が人肉を土地の首長に与え、土地の首長は生の娘を征服者たる首長に与えるという新たなる相互的交換関係を創出した。ここではどちらかが他方を吸収する訳ではなく、新しい存在のあり方（文化的コード）を作り出したのであった。今日のフィジー人の信仰は確かに「キリスト教」ではあるが、実際のレベルでは伝統的な信仰と深くかかわりあって、新たな多元的な信仰体系を形作っているのである(36)。その基本的なモデルは今回紹介したキリスト教受容の時代に既に見られる(37)。

注

（1）V・ターナー「象徴と社会」梶原景昭訳、紀伊國屋書店一九八一。p. 31.

（2）Barbara G. Myerhoff, "*A Death in Due Time: Construction of Self and Culture in Ritual Drama*", in *Rite, Drama, Festival, Spectacle* ed. by John J. MacAloon, pp. 149-178.

（3）（2）の論集中、B・ベブコックは道化の普遍的な特徴を明確にするため、民族誌や哲学的議論の中で述べられているコメントを、並列的に並べるコラージュ的方法を採った。絵画や写真の領野では、ブリコラージュ自体が批判精神を反映することになる如く、その本質に批判精神を持つ道化の問題を扱うのに、彼女の記述法は、有効であり、かつリズミカルでもある。このリズム感覚も対話にその本来の特徴を持つ道化にとってはおろそかにしてはならぬ点である。Barbara A. Babcock, "*Arrange Me into Disorder: Fragments and Reflection on Ritual Clowning*", pp. 102-128.

（4）この枠組は、筆者がフィジーの儀礼的贈与交換を記述した際、青木保教授から指摘され、採用したものである。「フィジーの Veiqaravi」民族学研究四九巻一号、一九八四、pp. 27-62.

（5）ギリシア悲劇、イタリア・ルネサンス、フランス古典劇を通じて見られる法則である。起承転結が明瞭で、時・所・行為の単一性を守ったドラマツルギーである。（「演劇概論」河竹登志夫、東京大学出版一九八四 p. 19.）また漢詩の絶句の組み立てにも見られる。ここでは時間的継承性を問題にする。

（6） 第一段階の違反といっても、宣教師の滞在はフィジー文化では違反とは考えられぬ。彼らの布教活動が問題になる。第三段階の矯正は、ここではむしろ転換の段階として捉えられるべきである。

（7） 人食に関しては、
Thomas Williams, "Fiji and the Fijians," vol. 1, 1982, Fiji Museum, pp. 205-214.（初版、1858, London）
"The Journal of William Lockerby Sandalwood Trader *in* The Fijian Islands during *the* Years 1808-1809," ed. by Sir Everard im Thurn, 1982, Fiji Times & Herald Ltd.（初版、1856）

（8） 妻の伴死は、T. Williams, 1982, vol. 2, p. 302, p. 321, p. 322.

（9） 魂の道
Basil H. Thomson, "The Kalou-vu (Ancestor-Gods) of the Fijians," Journal of the Royal Anthropological Institute, vol. 24, 1895, pp. 340-359. "The Path of the Soul to Hades," trans. by Mr. G. A. E. W. Beaucere, in Transactions of the Fiji Society, 1916, pp. 1-9.

（10） Sione Lātūkefu, "Church and State in Tonga", Canberra, 1974, p. 25, p. 31, p. 41.

（11） Sione Lātūkefu, 1974, p. 47.

（12） Ibid., p. 29.

（13） Ibid., p. 59.

（14） Ibid., p.64.

（15） James Calvert, "Fiji and the Fijians," 1983, Fiji, vol. II, p.56.（初版、1858, London）

（16） Sione Lātūkefu, 1974, p. 45.

（17） James Calvert, 1983, vol. II, p. 25. フランスをフィジー語ではヴェラニ（Verani）と読む。

（18） Ibid., 1983, vol. II, pp. 323-324. アメリカから七六トンの船が届き、それを「ザコムバウ号」と名付けた。代金として千ピクル（一ピクル約六〇キログラム）のナマコを支払った。更に別に五百ピクルをシドニィからの二本マストの帆船に支払うはずであった。オーストラリアから先に船がついたが、代金のナマコを集め始めた時にすぐアメリカから船が届いた。アメリカ製の新しくより大きな船を手元に留め、前の船を解約した。

（19） Ibid., 1983, vol. II, pp. 330-331.

（20） Ibid., 1983, vol. II, pp. 334-336.

（21） Ibid., 1983, vol. II, pp. 344-349.

（22） "The 'Tuka' Religion", 1910, Transactions of the Fiji Society, pp. 51-57, read by Hon Wm. Sutherland. A. B. Brewster, "The Hill Tribes of Fiji," 1922, London, pp. 236-248.

（23） ザコムバウは政権を握っていたが、まだゾロ地域では山地民が反抗をくり返していた。またザコムバウの反対勢力であったレワの首長ンガラニンギョが死んだ時、宣教師が毒殺したと思い臣下が教会を焼いたが、その時アメリカ領事ウィリアムスの家も焼いてしまった。その賠償をウィリアムスはザコムバウに請求した。一八六〇年に彼は死に、彼が集めた土地をウェスレヤン教会に譲ったが、賠償に関してはまだ残っており、後にアメリカからその代金を払うか、国を譲るかと責められた。それに対して、イギリス側からの賠償を肩代りするとの申し出を受け、一八七四年イギリスにフィジーを譲渡した。一八八五年頃は植民地政府が成立していたが、ゾロにまではなかなか眼が届かなかった。

（24） 利害の対立する登場人物同士、またはマイヤホフの事例の如く「不確定と予言可能性、無力さと選択権」などの宗教的領域での対立要素間の関係のあり方が問題となる。

（25） 橋本「フィジーのVeiqaravi」一九八四年。

（26） トロブリアンド島では、姉妹の夫に兄弟が産物を贈るシステムがあり、一夫多妻は富を集め権威を獲得するシステムと密接に結びついていた。フィジーでは、子供は母方のオジが神に捧げる供物を受ける権利（vasu）を持っている。母方の親族はその子供（＝神）に供物を捧げることになり、一夫多妻はフィジーの首長制を支えるシステムであった。

（27） ポランニーによるアフリカの例では、子安貝と奴隷の交換が扱われているが、両者はそれぞれ適当な交換だと考えていた。

（28） 首長の権威は服装によって見分けられる。伝説の中では、頭に樹皮布

をターバンのように巻いた人物は、それだけで上位の首長だと識別された。

(29) Marshall Sahlins, "Raw Women, Cooked Men, and Other 'Great Things' of the Fiji Islands," in The Ethnography of Cannibalism, ed. by Paula Brown and Donald Tuzin, 1983, pp. 72-93, Washington.

(30) A. M. Hocart, "Chieftainship and the sister's son in the Pacific," American Anthropologist, 1915, pp. 631-646. 神への供物を横取りした時には、母方のオジの息子たち、すなわち、彼にとってイトコにあたる者は彼を殴ることができるが、供物を取り返すことはできない。

M. Sahlins, "Other Times, other Customs: the Anthropology of History," A. A. 1983, pp. 517-544 参照。

(31) M. Sahlins, "Raw Women……," 1983, p. 80.

(32) J. Calvert, vol. II, 1983, pp. 322-323.

(33) Ibid., p. 75.

(34) M. Sahlins, "Raw Women ……", 1983, p. 88.

(35) エドマンド・リーチ「文化とコミュニケーション」紀伊國屋書店一九八一、第十八章、青木保、宮坂敬造訳。

(36) Hubert and Mauss, "Essai sur la Nature et la Fonction du Sacrifice," L'Année sociologique, 1898, translated by E. E. Evans-Pritchard, 1964, Univ. of Chicago Press.

(35) 橋本、一九八四年参照。

(36) 現在のキリスト教の実態は、次の論文で明確にするつもりである。

(37) 最後になるが、食人の起源と文化の起源に関する神話を紹介しておきたい。M. Sahlins, 1983, "Raw Women……," pp.72-73.

「最初の男は妻と三人の娘と住んでいた。ある日漂流したカヌーに若い男がいるのを娘達が見つけ、自分達を妻にするように求めた。それに同意して、父親に娘の代りに食物を植えて贈ると申し出たが、不十分だと断った。この主人公の名をタムブア *Tabua* と言った。次の朝彼は岸に鯨が打ち上げられたのを思い出し、鯨からようやく歯を抜き取ってそれを贈物にして自分の *mana*（威業）を見せようとした。抜き取る時自分の前歯を折ってしまった。そこで彼は娘達の父に、自分の歯をヤム芋のように植えたらこのように大きな歯になったと作り話をした。父は彼の威業を認め、娘達を彼に与えることにした。その代り次のような法を守ることを父親が主張した。以後鯨歯をタムブアと呼ぶ。タムブアは結婚で女性の支払いとして使われる。他のすべての漂流者は、タムブアのようにこの地で人口を殖やさぬように、殺され、食べられる」。この話には、父親が老妻を絞め殺して、三人の娘を妻にしようという逸話も入っている。